

聖書:第一列王記13章1～10節

説教:その名はヨシヤ

はじめに

いつものようにこれまでのあらすじを振り返ってから今日の箇所を見ていきます。ことのきっかけは、ソロモンが亡くなったときにイスラエルの長老たちはソロモンの子であるレハブアムに対して一つの条件を出したことに始まります。「あなたの父は私たちに厳しい労働を課し、重い税金を取り立てたけれど、もしあなたがあなたの父とは違って労働と税を軽くしてくれたならば、あなたを王として迎え、あなたに仕えます。」

長老たちは大げさなことを言ったのではない。事実国民は苦しみを味わっていた。ですから、レハブアムはきちんと考えて返事をするべきでした。ところが彼は強いことばで拒絶してしまう。交渉は決裂しました。ユダ族とベニヤミン族を除く十部族は結束してレハブアムに反旗を翻し、ヤロブアムを王に迎えて北王国イスラエルの独立を宣言してしまいます。いっぽうレハブアムは、ユダ族とベニヤミン族に支えられて南王国ユダの王となる。

## 1 神の人

### 1) イスラエルの分裂(紀元前931年)

この事件が起きたのは、紀元前931年であると言われます。この数字についてはあとでもう一度触れることとなりますので、頭の片隅に入れておいてください。

今日見ていくのは、北王国ヤロブアム王のことについてです。前回、ヤロブアムが王となって最初にした国家事業のことを見ました。国が二つに分かれる前は、エルサレムにある神殿に行つて自由に礼拝ができました。しかし、北と南の間に国境が敷かれ、簡単には行き来できなくなるわけですから、神殿に行くのが非常に難しくなる。この問題を放置していたら、国民は不満を募らせ、自分を殺すに違いない。そう考えたヤロブアムは、勝手に礼拝所を建設し、祭司を任命し、お祭りの日も自分勝手に決めてしまう。そうすれば全部礼拝に関して必要なことが全部自分の国の中でできてしまうわけですから、国民の心も穏やかになるだろう。そういう計算でした。

### 2) その名はヨシヤ(紀元前640年 第二列王記23章15節以降)

そのようにして、ヤロブアムがベテルという町に建てた祭壇で香をたいていたあるとき、ひとりの神の人が主の命令によってユダ、つまり南王国からやってきます。彼は祭壇に向かってこう呼びかけました。2節。「祭壇よ。祭壇よ。【主】はこう仰せられる。『見よ。ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちをいけにえとしておまえの上にささげ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」

神の人は、ヨシヤという名の男の子がダビデの家に生まれると預言しています。ダビデの家ですから、目の前にいるヤロブアムの家系ではない。ダビデの家とは、すなわちユダ族のことで、そこからやがてヨシヤという王が出て、ヤロブアムが任命した祭司たちを倒すことになる。そういうことを言っている。

ここでヨシヤという具体的な名前が挙げられていることに注意してください。預言する立場から言えば、わざわざ名前を挙げるのはリスクが高い。どういうことか。仮に名前を挙げなかったなら、長い歴史をたどれば似たような事件を見つけることはそれほど難しくないでしょう。かつて神の人が語っていたことは、もしかしてこのことだったかも知れない。やっぱり預言は外れていなかった。そのような評価をされる可能性が高くなるわけです。

でも、ヨシヤという具体的な名前を挙げたとなれば、ヨシヤという人物が現れなければならなかったら、神の人が語った預言は嘘だった、ということになる。これは非常にリスクが高い話です。では実際にヨシヤは現れたのか。現れました。ヨシヤという王がユダ王国に出て来る。それはいつのことか。紀元前640年。さきほどイスラエルが分裂したのは紀元前931年であったと言いました。そうすると、神の人が預言してからおよそ三百年後にヨシヤが現れたことになる。そのヨシヤは何をしたか。彼は正しい信仰をもってヤロブアムが建てた祭壇を破壊していく。第二列王記23章にヨシヤがしたことが書かれていて、私たちはそのことを読むことができるので、神の人の預言は本当であると確認できます。

### 3) しるし

神の人が語ったのは、三百年後に起こることでした。そのような先のことを、ヤロブアムに対して

すぐに信じなさいと言っても無理でしょう。おまけに、みながありがたく拝んでいる祭壇が実は嘘偽りであると言われたわけですから、王の権威が深く傷つけられたのです。怒りが湧いてくる。すぐに王は祭壇から手を伸ばして「彼を捕らえよ」と命じます。ところがその伸ばした手がしなびてしまい、戻すことができなくなる。それと同時に、神の人が預言したとおりに祭壇が裂け、祭壇から灰がこぼれてしまいました。「こぼれる」というよりも、「ひっくりかえってしまった」と言った方がふさわしいかも知れない。

## 2 ヤロブアム

### 1) あなたの神、主に祈ってください

これを見てヤロブアムは恐怖に打たれながら6節でこう言っています。「どうか、あなたの神、【主】にお願いをして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手はもとに戻るでしょう。」

ヤロブアムはいったい何をしてきたのでしょうか。もう一度思いだしてください。イスラエルが二つに分裂した結果、北王国の人たちは南王国にあるエルサレムの神殿に自由に行けなくなる。神殿で礼拝することが非常に難しくなったわけです。そこで彼は二つの金の子牛を造り、こう宣言しました。

「もう、エルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上ったあなたの神々がおられる。」

神の人がやってきたとき、ヤロブアムは香をたいていました。いったいどの神に向けて香をたいていたのか。金の子牛です。ヤロブアムは、この金の子牛が自分たちを救ったのだと国民に教えました。ところが、その金の子牛を祭った祭壇の前でヤロブアムの手がしなびて動かなくなる。その時彼はなんと言ったか。「どうか、あなたの神、【主】にお願いをして、私のために祈ってください。」

ヤロブアムは突きつけられました。手がしなびて動かなくなるというこのみじめな状態から自分を救ってくれるのはどの神であるのか。金の子牛なのか。それとも主であるのか。そのような選択を迫られたのですが、人間は思いがけずに突然の出来事に出会うと、心の内に隠していたものがポロツと出て来ることがあります。ヤロブアムは、エジプトからイスラエルを救ったのは金の子牛であると言っているながら、金の子牛は救えない、主だけが救うことができると、多くの人たちが見ている前で言ってしまった。思わず、主こそが本当の神であると認めたわけです。

### 2) 悔い改めたのか

そのヤロブアムはこの後どうしたのか。7節。「私といっしょに家に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈り物をしたい。」私は間違っていました。偶像を造り、それを拝むようにと国民を教え、唯一の神である主に対して罪を犯しました。その罪に気がつかせてくださった神の人に是非お礼をしたい。ついては是非食事をしていってください。これを読めば、彼は悔い改めたかのような印象があります。神の人は、あらかじめ主のことばによって食べることも飲むことも、もと来た道も通ってはならないと固く禁じられていると言って、王が設けた食事の席には座らずに帰りましたが、それは大きな問題ではない。

本当の問題はその後です。ヤロブアムが本当に悔い改めたのなら、何をはずですか。すぐに金の子牛も祭壇も壊してしまうはずでしょう。ところが彼はしななかった。いままでどおり、なにもなかったかのように金の子牛を拝み続け、結局およそ三百年後にヨシヤが南王国のユダになったとき、神の人の預言どおりに祭壇が壊されていく。そのときまで人々は偶像を拝み続けたのでした。彼はあれほど主の力を目の当たりにしながら、奇蹟を見せられながら、悔い改めなかったのです。

## 3 神

### 1) あわれむ

さて神はこのようになってしまったイスラエルをどのようにご覧になっていたのでしょうか。1節をもう一度読みます。「ひとりの神の人が、【主】の命令によって、ユダからベテルにやって来た。」神は北王国の人たちのことを心配しています。それでわざわざ神の人と呼ばれるひとりの預言者を遣わします。この祭壇を拝み続けるなら、やがてこのようなひどいことが起きる。だから悔い改めなさいと勧めます。ことばだけでは信じないでしょうからと言って一つのしるしを見せる。ヤロブアム王の手が突然動かなくなり、祭壇が裂け、灰がまき散らされるようなことまでしました。

ヤロブアムが思わず、「あなたの神、主にお願いしてください」と叫んだとき、ヤロブアムにとって罪を悔い改めて正しい道に戻れる大きなチャンスでした。神の人が遣わされたのは、まさにこのためだったと考えられます。どんなひどい罪を犯したとしても、神はすぐにはあきらめません。最後の最後まで救いの機会を与えます。なんとか立ち戻るように説得します。それでヤロブアムは、自分の口で主こそ本当の神であると告白まですることがで

きた。でも喉元過ぎれば熱さを忘れるです。自分の手が元どおりになってしまうと、やっぱり元来た道に戻ってしまう。自分のしたことを改めようとはしませんでした。

## 2) 神の人を遣わす

意地悪な言い方をしますが、神はこのような結果になることを知らなかったのでしょうか。もちろん全能の神はすべてご存じです。ヤロブアムは何一つ悔い改めないとわかりながら、神の人を遣わす。どうしてそんな無駄なことをするのか。そういう疑問が湧く。いやもっとわからないことがあります。この後、この神の人は、だまされたあげくに獅子に襲われて死んでしまうのです。死ぬべきなのは罪を犯した別の人ではないのか。なぜ神に忠実に従い、神のことばを正しく語った者が、このような目に遭わなければならないのか。私たちは戸惑います。神の人の人生はなんだったのか。彼は死ぬために派遣されてきたというのでしょうか。それで人々が悔い改めたというのなら、死んだことにも大きな意味があったかもしれない。でも何も起きなかった。いったい神の御心はどこにあるのでしょうか。

## 3) イエス・キリスト

でもよく考えると、神の人がたどった道のりと似たような話がどこかにあったことを思い至ります。イエス・キリストです。この方は正しいことを語ったために、かえって人々に憎まれ、十字架で殺されます。それを見てだれが悔い改めたのか。悔い改めたのはごくわずかな人だけでした。神のひとり子である方がいのちをお捨てになったのにもかかわらず、上げられた成果はごくわずか。だれもが疑問に思う。でも、それが神の方法だったのです。

パウロは第一コリント1章25節でこう言っています。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」

いのちを捨ててまでして、罪人を救おうとされる愚かに見える神こそ、私たちの救い主であることをもう一度覚えたいと願います。